

聞き手 川島 葵さん ●フリーアナウンサー

カバディ 日本代表選手 新田 晃千さんに聞く



につた・てるかず
埼玉県出身、太正大学卒。
高校時代はレスリング部に所属。大正大学入学後、日本代表になれると勧誘されてカバディ部に入部し、競技生活を始めた。02・06年のアジア競技大会では主将を務め、10年大会では銅メダルを獲得。14・18年のアジア競技大会にも選手として出場した。

攻撃は1人、守備は7人、守備でも得点できるユニークなスポーツ。

川島 本日は、日本を代表するカバディ選手として長く活躍なさっている新田さんにお話をうかがいます。

新田さん、カバディというと、「カバディ、カバディ」と言いながらプレーするというくらいしか知らない人が多いのではないのでしょうか。

新田 ええ、あまりご存じない方は、全員が「カバディ、カバディ」と言うと思っていらつしやるかもしれませんね。

カバディは1チームが7人で、攻撃と守備を交代しながらプレーします。攻撃側の選手1人が相手のコートへ入っていつて、「カバディ、カバディ」と言いながら守備側の7人のうちの誰かにタッチして自陣に戻ります。そうすると、触れた人数の分だけ得点になります。3人にタッチして自陣に戻れば3点になり、タッチされた選手はドッジ

ボールのようにコートの外に出なくてはならないため、残りの4人でプレーすることになります。これを交互に繰り返しながら得点を競います。

守備側は、攻撃の選手をタックルして捕まえて戻れないようにすれば点が入ります。これが、おそらくほかのスポーツと最も異なる点であり、守備でも得点できるのです。極端にいうと、守備だけで得点して勝つこともできます。こういう競技は、ほかにはないのではないのでしょうか。

川島 面白いスポーツですね。「カバディ、カバディ」と言っているのは、攻撃の選手1人だけなのです。競技の動画を見たところ、鬼ごっこやドッジボール、ラグビー、バスケットボールなどのいろいろな要素が含まれているように思いました。「こんなスポーツの経験がある人は、カバディに向いている」というようなものはありますか。

新田 どのポジションでも俊敏性が必要ですが、ラグビーやレスリングといったタッ

クル系の競技経験がある人はディフェンダー（守備）に向いているかもしれません。オフエンス（攻撃）は相手に近付きすぎると思ってしまうし、離れていてはタッチできない。相手との間合いが重要なので、空手などでしょうか。

川島 全然違うんですね。いろいろな競技の面白さが詰まっているともいえますね。

発祥の地インドには、プロリーグも。小学生も授業で激しいプレー！

川島 私はまだ、実際に試合を見たことはないのですが、会場はどんな雰囲気ですか。

新田 最近は、いろいろな方が観戦にいらっしやいます。会場は和気あいあいとした雰囲気ですが、試合が始まるとピンと張り詰めた感じですね。

川島 カバディはインドが発祥だそうです。が、インドでご覧になったことはありませんか。

新田 インドの小学校の中庭で、体育の授業にカバディをやっているのを見ました。

コンクリートの上で、膝から出血しながらもお構いなしでやっていたんですよ、小学生たちが。その激しさに驚きました。

インドにはカバディのプロリーグがあって、テレビでも試合を観ることができると、非常に人気のあるスポーツです。トッププレーヤーになると、3カ月くらいのシーズンで3000万円〜4000万円くらいの年収があるようです。

川島 国際的にみると、やはりインドが断然強いのでしょうか。

新田 2018年のアジア大会でインドは2敗してイランが優勝し、韓国が2位でした。韓国は日本よりもだいぶ後に始めて、かつては来日して一緒に練習したり、私がアドバイスした選手などが、現在は韓国チームの主力になっています。韓国は、選手の強化にだいぶ力を入れているようです。

今は、おそらくインド、イラン、韓国、パキスタンが世界の4強でしょう。また、カバディのワールドカップが開催されてい

新田 晃千さん



て、南米やアフリカ、欧州にもチームがあります。

川島 日本は、世界ランキングではどのあたりでしょうか。

新田 10位前後ではないでしょうか。一期はトップ4くらいにいたこともありすが、最近はやや低迷気味です。若手の成長に期待しています。

競技人口が少ないので、頑張れば日本代表になるのも夢ではない。

川島 新田さんほどのようなきっかけでカバディに出合われたのですか。

新田 私は高校時代はレスリングをやっていました。大正大学に入学する時に、一から始められるスポーツはないかと思って探していたところ、カバディ部の先輩から勧誘されました。まだ競技人口が少ないので、頑張れば日本代表になるのも夢ではないと言われて。

川島 では、新田さんに声をかけた先輩は、新田さんがレスリングをなさっていたことは知らずに勧誘なさったわけですか。

新田 ええ。マイナーな競技だったので、とにかく人数を増やしたかったのだと思います。私が入学したのはカバディ部ができて5年目で、初代の先輩たちが卒業した年でした。ちょうど大学公認の体育会となり、もっと頑張っていこうという感じでした。
川島 初めてカバディをご覧になって、いかがでしたか。

新田 自分で「カバディ、カバディ」と言うのは、ちょっと恥ずかしいと感じました。まだルールをよく知らなかったし、何か道

具を使うわけでもないのに、分かりにくい。ですから、見るよりもプレーするほうが面白そうだと思います。

川島 実際にプレーしてみても、レスリングのご経験は役に立ちましたか。

新田 カバディは自分で走ってタッチしたり、走っている相手にタックルするので、レスリングは組み合った状態で競技するので、相手との距離感が違います。そういうことに慣れるのが、難しかったですね。
川島 当時の目標を、覚えていらつしやいますか。

新田 入学した当時は、学生のうちに日本選手権で優勝したいと思っていました。1年生の時に部としては優勝しましたが、私は補欠でした。3年生になってキャプテンになり、優勝することができた上に、年度末には日本代表の一員として海外遠征に参加し、初めて外国のチームと試合をすることができました。行き先はネパールでしたが、海外へ行くこと自体が初めてだったの

で、鮮明に覚えています。

**授業は欠かさず出席し、教室では
前の席に座ってきちんとノートを取った。**

川島 大正大学では、何を学ばれましたか。

新田 文学部史学科に入学しました。日本史専攻で、卒業論文のテーマは中世でした。

川島 普段は、授業のあとでカバデイの練習をするという形でしたか。

新田 そうですね。テスト前などはどうしても忙しくなるので、普段から気を付けていました。授業は欠かさずに出席し、教室ではなるべく前の列に座り、きっちりとノートを取る。そうやって授業を真面目に受けていけば、テスト勉強のために練習を欠席することもなく、ノートを読み返す程度で済みました。

川島 学生のお手本のようにですね。何か、信念のようなものがおありでしたか。

新田 やはり、大学には勉強したいことがあって入ったわけですし、学費は親に出し

てもらっていたので、自分がすべきことはきちんとしなくてはと思っていました。

川島 勉強とカバデイを両立させる中で、難しい時期はございましたか。

新田 卒業論文の時期や、就職活動は大変でした。周りは企業などに資料請求を始めているのに、私は海外へ試合に行ったりしたので、出遅れたと感じました。

川島 大学3、4年生というのは、就職するかスポーツの道に行くか、選択に悩む時期でもあります。

新田 カバデイはマイナーな競技なので、それを仕事にするのは無理でした。卒業後もカバデイを続けたかったので、年に1、2回は遠征のために長期休暇を取れるなど、なるべく練習がしやすいところを探しました。しかし、なかなかありませんでした。
川島 就職後もご自分でずっとトレーニングを続けてこられたのは、なぜでしょうか。
新田 妥協するのは簡単ですが、自分に負けたくないという思いがありました。また、

アジア大会には日本選手団の一員として行くわけであり、恥ずかしいことはできませんから、トレーニングにも力が入ります。

ただ、カバデイの練習だけだとモチベーションを保つのがだんだん難しくなつたので、ちよつと目先を変えようと、34歳の頃から大学のヒンディー語講座に通つたり、日本語教師の養成講座に通つて資格を取つたりしました。ヒンディー語は、インドに行ったときに役立ちました。

**狩猟を起源とするカバデイは格闘技、
国際試合では体重100キロの選手も。**



川島葵さん

川島 新田さんはカバデイの魅力を広めてこられたと思いますが、改めて、カバデイのおもしろさを教えていただけますでしょうか。

新田 やはり、道具を一切使わないで激しいボディコンタクトをするということや、攻撃は1人で守備は複数的人数という、いわば個人競技とチーム競技の両方の面白さを楽しめることでしょうか。

カバデイの起源は狩猟、すなわち素手で狩りをするところから来ているといわれています。ですから、普段は眠っている野生の本能や闘争心がかき立てられ、スポーツという非日常の場面で解放されるといった魅力もあると思います。

川島 カバデイの動画を見ると、ディフェンス側の選手同士が手をつないでいることがよくあります。1人ずつのほうが動きやすいのではないかと思いますか。

新田 あれは「チェーン」といって、1対1でタックルに行くと、頭上も含めていろ



「チェーン」をする新田さんと川島さん

いろな方向にジャンプして逃げられるので、それを防ぐためのものです。また、守備側の両端の選手は動く距離が長いうえに、敵陣に近い位置になりやすいため、つないだ手を思い切り引っ張って素早く後退させたり、後退したところを追いかけてきた攻撃の選手を、反対側の端の選手が後ろから捕まえるといったさまざまなフォーメーションがあります。作戦は相当複雑です。

川島 頭脳戦でもあるわけですね。

新田 人数の増減もあるし、攻撃でも守備でも得点できるので、試合の残り時間を考

えながら、さまざまな戦術を駆使して戦います。

川島 カバデイはスポーツでありながら、何かの儀式または祭りのような不思議な印象も受けました。しかも、こんなに激しいスポーツなのかと驚きました。

新田 そうですね。カバデイは格闘技に分類されています。

川島 新田さんはけがをなさったことがありますか。

新田 学生時代は鼻を折ったくらいですが、社会人になってからは、膝の靭帯3本と半月板を同時に断裂したり、眼窩底骨折も経験しました。

川島 大変でしたね。こうして新田さんにお話をうかがっていると、とても優しい印象を受けますが、やはり試合になるとガラッと変わったりのりなのでしょうか。

新田 そういう面は確かにあります(笑)。

カバデイでユニークなのは、国際試合では85キロという体重制限があることです。

しかも、例えば大会期間が1週間の場合でも、計量は初戦の前に1回だけ。ですから、体重が100キロもある外国の選手が85キロに減量し、げっそりした顔で計量をクリアしたあと、たくさん食べて100キロに戻して試合に出てくるのです。85キロと100キロでは、タックルされたときの衝撃が全然違います。

川島 日本にも、そういう選手はいらっしゃいますか。

新田 日本で85キロぎりぎりの選手は、ほとんどいません。私も普段は81キロくらいですが、試合には78キロまで絞って出場します。普段から体重管理には気を付けており、もう20年以上、1日2回計測して記録しています。

アジア大会に6回出場し、スタンディングオベーションを受けた。

川島 今、日本のカバディ人口はどのくらいですか。

新田 実際にプレーしているのは、男女合わせて1000人くらいでしょう。

川島 カバディを楽しむようになるきっかけは、どのような形が多いのでしょうか。

新田 マイナー競技なので、まずメンバーを7人集めるのが大変です。カバディに興味を持った人が日本カバディ協会に連絡をして、月1回開催される体験会に参加する。

そこで実際にやってみてから、友人や地元の知り合いなどを集めてチームを結成するといったパターンが、けっこうあります。

体験会の参加者は中学・高校生が多いのですが、私より年齢がちよっと上くらいの人もしらっしゃって、楽しんでおられます。

最近では、カバディをプレーする高校生を主人公にしたマンガが人気があり、それを読んでカバディに興味を持ち、体験会に参加する人が非常に多いです。マンガの影響はだいぶ大きいようです。

川島 新田さんが初めてカバディをご覧になったときは、「カバディ、カバディ」と言

うのが恥ずかしいと感じたとおっしゃいましたが、今の中学・高校生も同じですか。

新田 いえ、皆さん結構普通に声に出しています。マンガも読んでいるし、インターネットで動画も見る事ができるし、インテンドのプロリーグなど、トップレベルのプレーも簡単に見ることができずから。

川島 新田さんは46歳の現在も日本代表チームの一員としてプレーなさっています。まるでカバディ界のレジェンド、スキー・ジャンプの葛西紀明選手みたいですね。

新田 葛西さんとは同い年です。

日本代表では私が一番長いものの、国内の大会では私より年上の選手もいらっっしゃいます。海外の大会に行くと、かつて戦った同世代の方々は、今や各国の監督や協会関係者になっていくことが多いようです。

2018年のアジア大会のときに、私が計量をしていたら、誰かが「彼は6回目の出場だ」と言ったので、みんながスタンディングオベーションをしてくれました。

**自分をもっとやれたのではないかと
の思いから、現役を続行。**

新田 私はかつて、30歳くらいで引退しようと思っていました。26歳でアジア大会に出場し、30歳で迎える次の大会には日本代表のキャプテンとして参加して、メダルを取って引退するというプランでした。

川島 30歳になられた2002年の釜山大会に、実際にキャプテンとして出場なさいました。

新田 それまでのアジア選手権などで、日本は銅、銀、銀と3大会連続でメダルを取っていました。2002年のアジア大会では、メダル常連国のバングラデシュに勝つなどして、最終戦で勝つか引き分ければメダル確定というところまでいきました。ところが、最終戦では、それまで全敗だったマレーシアに敗れてしまったのです。

川島 何が起きるか分からない。

新田 そのため、このままでは終われない

と思いました。次の2006年のアジア大会でも私はキャプテンでしたが、またしてもメダルに手が届きませんでした。34歳だったので、どうしようかなという気持ちもありましたが、大学2、3年生のいい選手が3人くらいいたので、彼らをもっと伸びれば次はいけるのではないかと思って、もう4年だけ続けようと思えました。

川島 そうして迎えた2010年の広州大会で、銅メダルを獲得なさいました。

新田 アジア大会でメダルを取ったのは初めてなので、とてもうれしかった思い出があります。

川島 では、そこで引退するという考えもありません。

新田 実は、34歳のドーハ大会のときは、選手村に入ってから肉離れを起こし、次の広州大会では直前練習だけがをしました。どちらも試合に出場はしたのですが、10%

の力を出し切れなかった。メダルを取ってうれしい反面、自分をもっとやれたのでは

ないかという思いが拭いきれませんでした。**川島** ご自身に厳しくて、本当はもっとできたのではないかと、もっと上を目指せるのではないかという気持ちをずっと持っています。うっせつたのですね。

新田 ええ、私はオフエンス（攻撃）のプレーヤーであり、個人としての能力が結果を大きく左右するので、けがで力を出し切れなかった自分自身に満足できない気持ちがあり、その後も現役を続けてきました。

川島 年齢を重ねるに従って年下の選手が増えてくると、後輩の育成とか、現役を続ける自分の背中を見せて、といった思いがふくらんでいったのではないですか。

新田 私は、一緒にプレーする中で教えていくというスタイルしかできないと思って、コーチ兼任で続けていた時期もありました。が、やはり選手一本に絞ろうと、ほかの人にコーチとして参加していただきました。

川島 選手としての活躍を支えてきたお考えとか、常に意識して続けていらつしやる

ことはございますか。

新田 30歳くらいの頃から毎年、個人でインドに行つて、クラブチームで練習をしてきました。

大学4年生のときにバングラデシユへ遠征に行った際に、卒業旅行も兼ねてインドのコルカタ（旧・カルカッタ）まで足を延ばし、地元のクラブチームで練習をさせてもらったことがあります。

30歳でアジア大会に参加し、メダルを逃して悩んでいたときにそれを思い出し、もう一度本場へ行つてみようと思ひました。それ以来、毎年1回は行つており、途中からは若手の選手を連れて行くようになりました。

インドで泊まるのは、部屋には扇風機とベッドだけ、トイレやシャワーは共同という1泊百数十円のところです。毎日、インドの満員電車で揺られて練習に通う2週間の生活は、若い選手にとっては非常に刺激的な体験になります。カバディに対する姿

勢や、日本でどれだけ恵まれた環境にいるかということに気付く。私にとつても原点回帰という意味があり、毎年気持ちを新たにしています。

自国開催となる2026年のアジア大会は金メダルが最大の目標。

川島 新田さんはアジア大会に6大会連続で出場なさつて、日本のカバディを引っ張つているお一人だと思いますが、日本でももっと盛り上がると思いますね。

新田 おっしゃるとおりです。2026年



新田晃千さん（右）と川島葵さん
（2018年11月13日 大正大学にて）

には愛知でアジア大会が開催される予定ですが、自国開催なので、やはり金メダルが最大の目標です。そのためには、まず2022年のアジア大会でメダルを取らなくてはいけないので、選手の強化・育成をもつと考える必要があります。一方、競技の普及はまた別の難しさがありますが、強化と普及は車の両輪のような関係なので、どちらも力を入れていかなければなりません。

最近ではマンガの影響もあつて、高校生のチームが頑張つていたり、二十歳そこそこでも優れた選手がいるといったように、裾野はだいぶ広がってきました。また、日本カバディ協会でも、小・中学校の授業でカバディをやつてみたいというご連絡があれば、どんどん講師を派遣しています。

カバディは草野球よりも手軽に楽しめるスポーツです。道具は何もいらぬし、場所だってバレーボールのコートくらい。町内会のちよつとしたお祭りでカバディの試合をするくらい身近になればいいですね。